

がんばれ花子

雪の中で象を育てた記録

信田修



がんばれ花子

雪の中で象を育てた記録

信田修治郎



がんばれ花子

NDC 914 19.4cm

定価 四二〇円

昭和45年3月1日

第1刷発行

著者

信田修治郎しのだ しゅうじ ろう

発行者

野間省一

発行所

株式講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号112

電話東京 五三一二(六代表)

振替口座 東京 三九三〇

印刷所
製本所

豊国印刷株式会社
黒柳製本株式会社

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

© SHUJIRO SHINODA 1970

PRINTED IN JAPAN

0095-166294-2253 (0)

目

次

第一部 病氣の子象

深夜の珍客——クル病の象がやってきた 9

助けなければならぬ——負けん氣がむくむくと 17

吊り上げてみよう——どうしても治したい 28

最初の診察——かならず治るぞ 37

後足が立った！——花子はんばり屋 42

太陽と月と水と——裏山で暮らす花子 53

めずらしい習性——不出来な肉体と驚異の器官 61

山を下りた花子——日ましにめざましい回復ぶり 71

第二部 嚴冬に挑む

越冬への懸念——無暖房越冬作戦 93

早すぎた冬將軍——牛舎での間借り暮らし 105

越冬の準備成る——食糧一万八千キロ 118

無暖房の温かい部屋で——平均室温二十度の秘密 124

いとしの花子——深まる愛情、広がる反響 139

早春のハプニング——花子、発情す 140

第三部 ふるさとへの道

一念発起——花子をタイへ帰してやろう 159

花子の健啖ぶり——ニンジン事件その他 166

はじめての旅興行——花子は千両役者 176

タイへの道——人々の善意に囲まれて 187

二度目の冬——もう寒さはこわくない 203

出発の春を前に——着々進む帰国準備 214

あとがき 235

装丁・稲垣行一郎

カバー・本社写真部

写真・宮野政雄

本社写真部

図版・直木久蓉

がんばれ花子——雪の中で象を育てた記録

第一部
病氣の子象



深夜の珍客

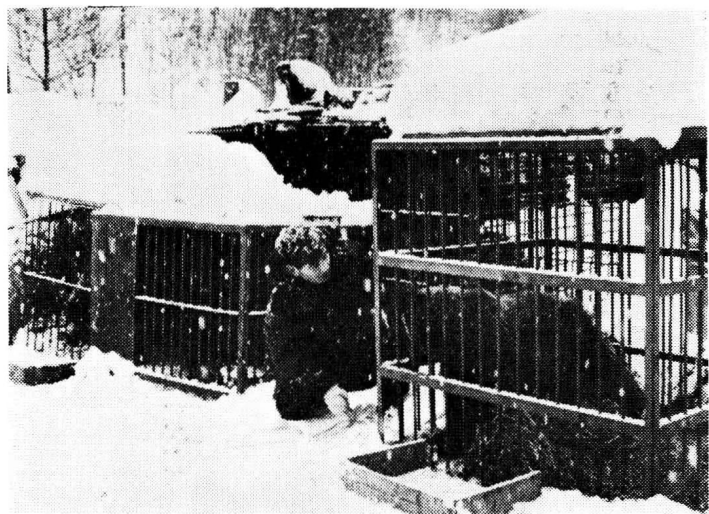
——クル病の象がやってきた——

ローソクの灯の下で

夜ふけて降り出した雨が、一時は蛙かえもの声を消すほど強く小屋根を叩いていたのに、いつの間にかまた小降りになっていた。

その夜も私は、家の中の電灯をひとつも点けず、奥の六畳間に長年使い古した小机を据えて坐り、太い三丁ろうそく一本に火をともし、背後に金屏風をめぐらしてペンを走らせていた。

戦争直前、まだ血氣盛んだった私が、北大の委嘱いしきを受け、道東から千島列島にかけてヒグマやアザラシなどの生息調査をやっていた、その頃の回想記を、市内の週刊新聞に寄稿していたからである。自分の体験半分に、旅で知り合った猟師やマタギから聞いた動物譚たんをミックスした実話風のものだ。文章に自信があるわけではなかったが、その新聞社から読者の強い反響があると聞かされて、一銭の金にもならない仕事であったが、張り合いを感じて毎週原稿を届けていた。女房や子どもと半年もの間別れて、銃一丁をたよりに猛獣たちと渡り合った、命がけの体験を想い



山荘の前庭のクマのオリと著者

起こすには、ろうそくの灯の下がもつともふさわしかった。

自然動物公園の夢

このところ季節的には早目な真夏の暑さがつづいていたが、今日はその好天がひきしぶりで崩れた。六十の坂を間近にした男ひとりが、クマやクジャクや犬、猫などの動物たちを話し相手に、札幌の都心部から六、七キロ離れたこの山間の一軒家に、もう四年も暮らしている。知人たちは何のために家族と離れてそんなところに住むのか、といぶかるが、私は自然のふところに抱かれた、この孤独な環境が無性に好きなのである。

それに年来の願望であるヒグマの研究が、ここなら自由にできる。家の前庭の鉄オリには最も多いときには七頭のクマが飼われていたし、いまもオス三歳のタローがオリの中で

眠りこけているはずだ。

クジャクやキンケイ、ギンケイ、チャボ、七面鳥、ホロホロ鳥など、母屋おちやの回りの金網の中で飼っている鳥たちは、いずれは実現させようと考えている私営自然公園の主役になる鳥たちだ。

母屋おちやと表道路の間にごろごろほうりっ放しにしてある大きな軟石なんせきも、その公園ブランの青写真にそって買い込んだものである。母屋のまわり一帯にはなかなば土に埋もれた高山植物の鉢が何百とあるが、これらの高山性の盆栽植物を正しい姿で育てるために、私は軟石を十数値も運び込んでいた。高山植物を平地へもつてくると、養分が過多になって伸びすぎてしまう。やはり石や岩の間の僅わずかかな土から養分を吸い上げて、きびしく生きるものでなければ高山植物らしい姿は保てない。

いまクマを飼っている鉄オリの向こう、崩れかかった納屋ぐやの前一帯がずぶずぶしたくぼ地になっているが、私はそこへ近くの精進川しやうじんの水を引いて池を掘り、コイやフナを放して釣り堀にし、まわりにクマや鳥たちや高山植物や軟石を配し、それに子どもたちの遊戯施設もつくって公園化しようと思っていた。

家の前の道路は、駒ゴルフ場にも札幌近郊屈指の景勝地アシリベツの滝にも通じていて、山間の開拓地にもかかわらずマイカー族の往来がはげしい。定期バスも通っている。ここに動物をとりにいった遊園地兼釣り堀をつくって、安い料金で開放すれば、きっと喜ばれるにちがいない。こういうたのしい生活がおとずれることを私は夢みていたのである。

深夜の大荷物

夜も十二時を過ぎると、初夏とはいえ家の中がどことなくひえびえとしてくる。ペンを置いて開け放された襖ふすまの間から薄暗い茶の間へ目をやると、わが親愛なる家族の一員、スピッツのチッコと三毛猫のミッコロが、フローリングの床に無警戒な寝姿で眠りほうけている。もう一匹の家族、雑犬のシロは、いささかカンがたかぶっていてだれにでも吠えかかるので、庭のニレの幼な木の根元の小屋に入れてつないである。自分だけつながれていろのが不公平だと思うのか、チッコやミッコロにもよく吠えかかり、とくにミッコロとはそりが合わない。私がクマのタローに餌をやっていてさえ、やつかんでケンケンと吠える。

今夜はこのくらいにして寝ようかと思いついてるとき、表道路に軽くバラスをはねて車が走る音がした。つづいて下手しもからごうごうと重い地ひびきが起こり、大型車両らしいエンジンの音が近づいて、家の前で止まった。だれかが庭先へ入ってくる。シロが、突然けたたましく吠え立てて、夜のしじまを破った。

がたぴしする表戸が押しあけられて、

「おやじさん、起きてるかい」

男の声がかかった。榎本富士夫君だ。私が机に坐ったまま、

「おう——」

と答えると、

「象を運んできたんですよ」

という。その一言で私は何事が起きたか合点^{がてん}がいった。子象の花子が着いたのである。

クル病の子象

もう一ヵ月も前から、横浜の動物輸入商京浜鳥獸貿易の、道内総代理店をやっている市内の鶯鳥園^{おうちようえん}の土田さんから、うちで去年旭川市の旭山動物園へ納めた

子象がクル病で廃獣になったから、引き取って標本でもつくらないかという話があった。運賃をどっちで負担するかはつきりしないまま、私はあいまいに引き受けていた。

廃獣になったとすれば、どっちみちその象は死ぬ運命である。旭山動物園の名誉園長の中侯充志博士はつい二、三年前まで札幌円山動物園長だった人で、私は家業が剝製^{はくせい}標本と毛皮商^{あきな}いだった関係上、何かとお世話になった。どうせ話の出どころは中侯さんであることはわかっているの^で、無下^{むげ}に断わるわけにもいかなかったのである。

もっとも受け取った象を解剖して頭骨^{とうこつ}の標本でもつくれば、北大の児玉博士は喜んで買ってくれるであろうし、決して一銭にもならない話ではなかった。それにしてもまず象の姿を見た上でなければ、いかようにすべきか判断がつかなかった。話が持ちあがってから、土田さんとも親しく、私の二女が嫁にいつている同業の榎本君が、その件で何度か私に連絡をとってくれていたが、それが今日になったものであろう。

茶の間の電灯をひねり、玄関先へとび出してみると、日通の大型トラックが尻をこっちへ向けて、ごとごとと庭先へ入ってくる。榎本君の乗用車の白コンテッサの姿が表道路の少し先の方に見える。トラックは庭の軟弱な地面にタイヤをめりこませ、ちょうど玄関前あたりで止まった。

シロがさかんに吠えたてている。

運転台のルーフに取り付けられている補助ランプが点けられて、荷台の上がぼんやり照らし出された。部厚い頑丈なチーク材でつくられた大きな枠が乗っている。その黄褐色の枠のスキ間から何か黒い塊がうごめいているのが見えた。これが私と子象の花子の最初の出会いであった。

風変りな荷下ろし

トラックのライトの光芒の中に、細い雨足が走り、灰色の軟石のいくつかが奇怪な影をつくって浮かび上がっている。半分光を浴びている鉄オリの中では、クマのタローが興奮して立ち上がり、手足をしきりにばたつかせている。母屋の陰の暗闇の中では、鳥小舎の気配も騒然としている。

トラックの運転台から運転手と助手がおりてきて、

「こんな時間になってすみません」といった。

真夜中の、音もなく降る細い雨の中で、風変りな荷下ろし作業がはじまった。

日通の人がレバーブロックを使って下ろすというので、私がロープの一端を裏山の上り口に葉をひろげているミズキの幹にゆわえた。ロープのもう一方は子象の入っている木枠ごと一巻きにし、それぞれにワイヤーが引っかけられ、トラックとミズキの中間にレバーブロックがセットされた。ハンドルが回されると、ギーギーときしみながらチークの木枠が象ごと動き出した。

手に汗にぎる思いの時間が過ぎてゆき、ようやく木枠がトラックの尻から半分ほど中空にせり